

山崎朋子 編

女の生き方
四〇選
上

文春文庫





文 春 文 庫

^{おんな} ^い ^{かた} ^{せん}
「女の生き方」四〇選 上

定価はカバーに
表示してあります

1995年4月10日 第1刷

編 者 ^{やま} ^{ざき} ^{とも} ^こ
山崎 朋子

発行者 堤 堯

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

T E L 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-714706-8

文 春 文 庫

「女の生き方」四〇選

上

山崎朋子編



文 藝 春 秋

まえがき

やまざきともこ
山崎 朋子

明治期より第二次大戦にいたるまでは、良き主婦になるための修養を説いた本はあつたけれども、〈女の生き方〉をタイトルとした書物はほとんどなかった。女は、良き妻・賢い母として生きるのが当然とされ、社会的にもそれ以外の生き方を許されなかったから、〈生き方〉を殊更に問う必要がなかったのである。

しかし、第二次大戦が終ると、〈女性の生き方〉を主題とした書物がおどろくほど多く出版された。江戸時代より長く女を縛ってきた家族制度が解体され、女性が主婦としてだけでなく職業を持つても生きてゆくことができるようになったため、生き方が問題になってきたからだろう。

そして、それから半世紀近くの歳月が経ったいま、女性の生き方を考えようとする書物は、いっそう増えていると言わなくてはならないのである。

一九九〇年代に入った今日、日本の女性は、かつてのように主婦（妻・母）として生

きるほかにも、いくつかの道を持っている。すなわち、結婚をし子どもも育てながら自身の職業もつづけてゆくという道があり、また、いわゆるディンクス——結婚と職業とを両立させながら子どもは生まないという道がそれである。そしてさらに、もうひとつ、結婚をせず独身で職業的人生に生きようという道があり、そのヴァリアント（変型）としての未婚の母という道だって拓けつつあると言えるのだ。

全般的な傾向としては、妻および母としてのみ生きる専業主婦はとみに少くなり、家庭生活をいとなみつつ職業にも生き甲斐を見る女性が多くなってきているという。が、目立つのは若い世代で、結婚をするにしてもディンクス形態を望み、そうでなければ独身で職業的自立に生きようとする女性が増えてきており、そのために、若い男性の結婚難がささやかれるまでに至っているのである。

従来どおりの主婦として家庭の場にいるのが幸せか、経済的に自立しながら生活的にはきびしい共働きを選ぶのが正当か、あるいはまたディンクス・独身職業人・未婚の母がよいのか、にわかに判断を下すことはできないと思う。戦前のように良妻賢母以外の道のなかった時代とちがって、生き方にいくつもの道が拓けつつあるまさにその故に、選択に迷いの色が濃くなってしまうというのが現状なのではないだろうか。

そういう状況にある現代日本の女性たちへのひとつの贈り物が、この上下二冊の書物である。昭和期を生きた四十数人の女性が、そのへ人生の軌跡を、さまざまに、そし

て鮮烈に語ったものだと言ってさしつかえない。——いずれも、雑誌「文藝春秋」に載った文篇である。

あらためて言うまでもなく「文藝春秋」は、〈男〉の雑誌というふうに見られているわけだが、よく見ると、意外に多くの女性たちが文章を寄せていることに気づく。そしてその文章は、舞台が女性雑誌でないために、思想や意見をストレートに表現するといふものでなく、自身の生活や体験をとおして語り訴える性質のものが多いのだ。

なお、編集部との相談で、現代の読者と考え方や生活実感のたいそう違う戦前および戦争直後期の文篇は採らず、現代とつながる一九六〇年頃より以降のものから選んだ。したがって四半世紀以上も前の文章もあるわけだが、すぐれて鮮やかな人生の軌跡は、時の光芒に耐えて今もなお輝き、読む者に〈人生、いかに歩むべきか〉の示唆を与えてくれると思うのである。

「女の生き方」四〇選 上 目次

まえがき

山崎朋子

3

旅は友情の墓場か

平林たい子

13

満洲宮廷——その流転と潰滅

愛新覺羅浩

26

自伝的男性論

淡谷のり子

80

全学連に娘を奪われて

樺俊雄

92

嵐の議事堂に消えた娘

樺俊雄

106

外務省の名物女性

萩原智恵子

121

鬼婆アと罵られても

丹あや子

130

恋は終りぬ

角田房子

159

わが愛は玄界灘をこえて

原富海子

209

「築地」が私を育てた	杉村春子	224
共稼ぎママの泣きどころ	俵萌子	239
私は百二歳・一世紀を生きてきて	吉井シヅ子	244
大統領と私 その真実の記録	デヴィ・スカルノ	258
	訳手 大宅壮一	
20世紀石器時代人と暮して	畑中幸子	288
娘と私・速記二代の哀歓	久保田勝子	307
四十年を看病に生きて	吉野登美子	323
老文豪五人目の妻として	ホキ・徳田	341
流転の女優 李香蘭との訣別	山口淑子	362

再婚につまずいた私の告白

石垣綾子

387

“ひめゆり”の墓標を越えて

柏原破魔子

412

事務服

石垣りん

436

わがアイデア母さん

井上ひさし

441

写真提供 文藝春秋写真部

共同フォトサービス

凡例

一、本巻は、昭和三十三年十月号より平成二年九月号までの「文藝春秋」に掲載されたものの中から、山崎朋子と編集部の責任で、自伝ならびに身近な者によって書かれた人物評の要素の多いものをえらび、発表年月順に編纂した。収録を許して下さった筆者や関係者の方たちに心からの謝意を表したい。

一、本文は原則として発表時のママとしたが、若干新カナ、常用漢字に改め、振りガナ、句読点をほどこしたものもある。

一、タイトルはすべて発表時のものである。サブタイトル、キャッチフレーズ、小見出しなどはカットした。発表年・月号は西暦とし、各文末に丸かっこで示した。たとえば（一九五八・一〇）は一九五八年一〇月号を示す。

一、タイトル署名のつぎの小字による説明は、人物紹介と当該記事の意味を解説するために、今回あらたに編集部によって、ほどこされたものである。

一、本文、前説、写真説明中、敬称は省略させていただいた。

旅は友情の墓場か

ひらばやし
平林たい子

仲の良かった者同士があることをきっかけに、急に不仲になることがある。たがいに相手の本性を見抜いてしまうからであろう。旅もそうしたきっかけの一つになる。人間観察の専門家である作家が、旅先で四六時中、顔をつきあわせていれば、それはさぞ鋭い相互認識になるであろう。この一文は作風も育ちも異なるプロレタリア文学の有力作家であった平林たい子と女の心理と生理を主題とした円地文子の、激しくやりあいながらも相互理解を深めた友情のアメリカ紀行である。

外国招待のグループ旅行がかえってくるたび仲間うちに思いがけぬ風波がたった話をきかされる。通訳のつもりでつれて行ったのが、言葉のわかる強味から団長格にのし上ったとか、出発の時は対等だった著作家と編輯者が旅さきで主人とお伴の関係に変わって

いたとかいうことから、思いがけない仲間われが起ることは避けがたいものらしい。私のような野次馬はいたってそういう後日談が好きな方で、そんな噂をききあつめると二葉亭訳の「四人共産団」という皮肉な小説に似た諷刺小説の構想が浮んでくるのをとどめられない。

ところが、こんど、友人の円地文子さんと二人で旅行をすることになったときには、そういう友情の運命については、全く考えなかった。

大宅壮一さんのような八方やぶれの野武士さえ世界の裏道に行く旅行では、そんな破綻を経験しない前に避けて、同行を誘う親しい中野好夫さんをことわり、正反対の側から南米を縦断することにきめたそうなのに私達は、先人の賢い慮りおもんばかも経験もみんな無視して、はじめから終りまで、一時間も離れている時間がなくぴったりくつついたきりのように予定を組んだ。

というのは、そもそも旅は道伴みちづれで、一人で行くよりも二人一緒に行く方が万事に便利だと信じたからである。私達と同じ日にアメリカ国務省の招待でシアトルからアメリカに入ったサンデー毎日の松田ふみ子さんも、一人旅を口惜しがって、何とか私達と一緒になれないかと相談をかけて来た。彼女の言い分によっても、一人でよい景色を見るより、「ああいい景色だわねえ」と話しかける相手のある方がよりよい景色に見えるだろうというのである。この試みは不可能だった。その上私は、出発点から都合わるく、



平林たい子

咳のため、円地さんから二日おくれて羽田をたつことになった。

その時見送りに来て下さった夫君の円地与四松氏が、いよいよ飛行機にのり込むとき、うしろの見送人を引離して一人追付いて来て、

「平林さん、貴女にぜひ言っておきたいことがあります。失礼だが、貴女も我儘だし文子も我儘だから旅先で悶着が起らないとも限りません、そんなときには、何かと譲り合って喧嘩だけはせずにかえって来て貰いたいんだ」

と切なる面持で囁かれた。さすがに、若いころ新聞特派員の生活を経験した苦勞人のことばである。私ははっとするのと一緒に、そこまで繊細に夫人の上を思う御良人の存在が自分の身と引きくらべてつくづく羨しくて、「勿論です。承知しました」と涙ぐみ

そうになぞいた。

しかし、与四松氏が、特に私を追って来て文子是我儘だというのだから、相当我儘であるのかも知れない。いや、彼女が、夫君の言われる如く我儘なことは、勿論知らぬわけではない。良家に育ち、才能に恵まれ、人に頭をさげる苦勞を知らない彼女が、我儘でない筈はないので